



『ジーニアス和英辞典』大改訂!

まず、いい日本語を

編集部



和英辞典は、「これを英語でどう言うか」を知るための道具であり、人が求めているのは英語に関する情報です。しかし、和英辞典は日本語で引きます。英語に関する情報を適切に届けられることができるかどうかは、つまるところ、よく使われる日本語の表現がきちんと載っているかどうかにかかっています。

今回の改訂では、このような認識のもと、辞書の骨格ともいえる「日本語」の質を高めるためにかなりの労力を注ぎました。

特筆すべきは『明鏡国語辞典』との連携です。著者の一人である加藤博康先生が和英の編集に加わってくださいました。先生にはまず第2版のすべての用例の日本語に目を通していただき、適切かつ自然な表現という観点から修正や削除をしていただきました。同時に、必要な日本語の言い回しを新たな用例として多数加えていただきました。英語が先にあるようなものはやめて、用例はあくまで日本語を出発点にしようという方針によるものです。ここで『明鏡』の用例を使うことができたのも大きなメリットでした。

第3版の用例は、このように『明鏡』とその著者によって基礎が作られました。これを順次英訳していったわけですが、それで和英辞典の用例ができあがりとなるかという、話はそう単純ではありません。

状況をもう少し明確にしなければうまく訳せない。用意された語句を次々英訳していくと、同じ英語ばかりを使うことになり、他の英語を使った例を別に作らなければならない。日本人が考えた訳をネイティブスピーカーが直すと、元の日本語からずれてしまい、今度は日本語の方を変えたい。ここはこの前置詞を使った用例がほしい。[C]用法と[U]用法と両方の例が必要だ。……日本語を見ているだけではわからない問題が次々立ち現れてくるのでした。

用例の英訳を進めるに従い、最初に用意した日本語は様々に改変され、削除され、そこに新たな用例が足されていきます。そして、英語としての必要性により加えられた表現のなかには、日本語としてはどうかというものも混じってきます。

和英辞典において、日本語として普通でない表現は結局のところ載せる意味がありません。英訳が終わった用例は、加藤先生にもう一度日本語を点検していただきました。また、これ以降の日本語の見直しにおいては、経験豊かなフリーあるいは会社所属の編集者の方々に力を発揮していただきました。あまり使われていない表現を削ったり、相対的に高頻度の表現を選んだりするのに、Googleなどの検索エンジンを活用したのも今回の改訂の特徴です。

それぞれの項目において、英語中見出しとの有機的なつながりを持たせつつ用例を適切に配置するのは非常に手間のかかる作業です。用例の追加・修正は校正の最後の段階まで続き、そのたびごとに日本語も厳しく点検されました。結果として、この辞書には「よく使われる自然な日本語」あるいは「その言葉を使った典型的な日本語表現」が並んでいるはずですが、そして、日本語に厳しい目が向けられることで、各用例は意味や状況が明確になるように整えられ、それが英訳の精度を高めることにつながったと思います。

日本語に力を入れたのは用例だけではなく。『明鏡』のデータも活用しつつ、追加語の選定には相当の手間をかけました。語義区分・相互参照・見出しの表記に関しても、国語辞典の編集スタッフの協力を得て、十分な検討を行いました。

和英辞典の編集において、国語辞典との連携は初めての試みです。それ以外のことも含め、日本語に大いにこだわった改訂になりました。(T)